

第7回 母上様には足を向けて寝ることはできません

母は昭和一桁生まれの専業主婦でした。

私の記憶にある母は、時々、外で働きたいとつぶやくひとでした。本当は、自分の能力を外で思う存分発揮したかったのだと思います。でも、時代はそれを許しませんでした。

彼女がやりたいことをやれるようになったのは、夫である私の父が亡くなってからのことでした。

65歳を過ぎてから写真を趣味とし、いろいろな写真教室や同好会に入り、国内外に出かけては写真の技を磨きました。

自宅を改装してアトリエまで作りました。

そうして、ついに独自の技法を編み出したようです。

彼女が所属する会限定ですが、作品を見るだけで作者が彼女だとわかってもらえるまでになりました。

毎年開かれるその会の展覧会で、年々完成度が上がる作品群を前に「負けました！」と私は深くこうべを垂れるのでした。

そんな母が、私たち一家の「お助けマン」でした。

子供たちが小さかった頃、まだ今ほどワクチン接種が充実していなかった頃の話です。冬になるとインフルエンザが怖く、春になると麻疹や水ぼうそうにおびえ、夏になるとプール熱のうわさに右往左往と、子供の感染症にはいつもびくびくしていました。

病気が怖いよりも、看病ローテーションをどう組むかが、いつも悩みの種でした。

特に、学校指定の感染症にかかった時は、自宅待機期間が長いので往生こきました。夫が大活躍してくれましたが、彼の都合がつかないこともありました。

そんな時の「お助けマン」が母でした。長い時には片道2-3時間をかけて、自宅まで来てくれました。掃除も料理も、子供の世話もきっちりやってくれました。



彼女が帰った後、
「この部屋はこんなにきれいな部屋だったのか。
こんなにきっちりと片付くのか。」と、
いつも感心しました。

おばあちゃんが来てくれると、
おいしい料理が食べられると、子供たちも大歓迎。
特に、彼女の作るビーフシチューとカレーは絶品でした。
子育て中の一家には、
いざという時の「お助けマン」が必要だと身をもって体験しました。

今年に入って、
兵庫県にある大学の教員をしている末の娘が第一子をもうけました。
私たちにとっては10番目の孫です。

現在、末娘一家は、私たちの家から自転車で30分ほどの団地に仮住まいをしています。

私ではなく、
大学が休みに入った夫が「お助けマン」になり、
末娘一家のサポートを始めました。
子供がまだ新生児なので子守としての実力は発揮できませんが、
買い出しや料理などのチョアを担当しています。

末娘の研究手法は、夫のそれと似ています。
ということで、一家が兵庫県に戻っても、
彼女の研究継続のために「研究支援員」役を果たそうと、
彼はただいま計画中のようです。

私は、背中で応援エールを送っています。

「お助けマン」な母は4年前に亡くなりました。

母上様、いろいろお世話になりました。

ありがとうございました。

バトンは私たち、もとい、私の夫がしっかり受け取りました。

